

～旧約聖書を読んで感じること～ (36) 士師記(3) 士師ギデオンの戦い



F. A. Maulbertsch(1724-1796)

デボラ亡き後、イスラエルは主の目に悪とされることを行っていました。今度はミディアン人がイナゴの大群のようにやってきて、略奪しつくしました。隠れて暮らさなければならない状況になりました。その時、マナセ族のギデオンに主の使いが呼びかけ、「わたしがあなたと共にいるから、あなたはミディアン人をあたたかも一人の人を倒すように打ち倒すことができる」(士6:16)と告げました。ギデオンは、ミディアン人から略奪されないように、隠れながらも働く、非常に用心深い、勤勉な、謙遜な人でした。けれども神を信じ得ない苦悩を負っていました。

「もし御目にかないますなら、あなたがわたしにお告げになるのだというしるしを見せてください。どうか、わたしが戻ってくるまでここを離れないでください。供え物を持ってきて、御前におささげしますから」(士6:17-18)と言うほど、用心し、神の確かさを求め、また、誠実に対応する人でした。ギデオンが供えた捧げものを主の使いが焼き尽くした時、ギデオンは恐れ、主に会ったことを確信しました。

すぐに、ギデオンは変わりました。ギデオンは召使いの中から10人を選び、父が祀っている祭壇のバルヤアシェラの像を破壊し、そこを主の祭壇に変えました。まず、宗教改革、信仰を取り戻すべきという行動を起こしました。それも自分の父親をやり玉にあげたのです。けれども父は彼を理解し、同族の人々から「息子を殺せ」と責められた時に、「もしバルヤが神なら、自分の祭壇が壊されたのだから、自分で争うだろう」と息子ギデオンを支えました。主の霊がギデオンを覆った(士6:34)ので、ギデオンは士師として立つ自覚を持つようになりました。



供え物 Francois Bouchert, 1703- 1770

とうとうミディアン人がアマレク人、東方の諸民族と結束し、陣を敷きました。ギデオンは角笛を吹き、それを聞いて、同族のマナセ族、遠くのゼブルン、ナフタリ、アシェル族も呼びかけに応じてなんと3万2千人もイスラエルの平野に集結しました。主の使いはその数を見て、多すぎると言います。「犬のように舌で水をなめる者、水を手ですくってすすった者に分けなさい」と命じました。すると水を手ですくってすすった者、すなわち、戦闘態勢の備わった者はわずか300人でしたが、その300人を持って戦いなさいと命じたのです。この僅かな人数で大軍とどうして戦えるでしょう。ギデオンは非常に恐れましたが、敵陣の様子を探り、彼らも怯えていることを知り、神の助けを確信しました。そして、深夜に松明を壺に入れて隠し、敵陣を包囲した後、一斉に松明をかざして角笛を吹き鳴らしました。敵陣は総立ちになり、叫び声をあげたり、または同士討ちをしたりして、敗走していきました。追撃し、ミディアン人の王たちを捉え、処刑し、勝利を得ました。

この後ギデオンは協力しなかったイスラエルの民を処罰し、厳しい面も見せました。イスラエルの民はギデオンに「あなたはもとより、ご子息、そのまたご子息が、我々を治めて下さい」と懇願しましたが、ギデオンは彼らに答えて、「わたしはあなたたちを治めない。息子もあなたたちを治めない。主があなたたちを治められる。」(士8:23)と、王になることを拒否し、信仰に立つことだけを勧めました。

戦利品による財宝で祭司だけが着るエフォドを作り、それを祭壇に飾りました。平穏な時代になり、ギデオンは財産もでき、安泰な生活を送りました。また、王子のような風貌だったそうです。それらが彼の名誉ある地位と相まって、「ギデオンとその一族にとって畏となった」と記されています。ギデオンには心優しい長子イエテルもいたのに、多くの妻、70人の息子、側女もいたと記されています。